

# リアスの海から地域に希望を

三陸沖は、世界三大漁場の一つにも数えられる好漁場。教科書にも載っている、良く知られた事象です。性質の異なる2つの大きな海流、すなわち太平洋を日本列島に沿って北上する黒潮（高水温、高塩分、貧栄養）と千島列島から北海道太平洋岸に沿って南下する親潮（低水温、低塩分、富栄養）が三陸沖でぶつかり合うため、南の魚と北の魚の両者が漁獲されるのです。沿岸域では、これら2つの海流に加えて、東シナ海から日本海を北上して流れる対馬海流（高水温、高塩分、貧栄養）が津軽海峡を経て太平洋側に流入し、三陸沿岸を南に流れています（津軽暖流と呼ばれます）。これら3海流の強さや流路は季節や年によって変化するため、三陸沿岸域の海洋環境、獲れる魚の種類や量は場所によって異なり、同じ場所でも季節や年ごとに変わるのです。

三陸がリアス式海岸と呼ばれる複雑な海岸線を持つ地域であることも広く知られています。様々な形状の異なる湾が数多く存在し、湾内の流れの強さや向きは湾の形状や海底地形によって複雑に変化します。さ

らに、各湾や海岸には大小様々な河川が流入し、場所によっては海底湧水も湧き出しているため、各地域（湾）の海はそれぞれ異なった環境を持つていると考えられます。環境が変われば、そこに棲む魚や貝の種類も異なると予想されますが、実は、三陸の各湾で海洋環境が具体的にどのようになつていて、生物の量や種類がどのように異なるのかについて、科学的にはまだ良くわかっていないのです。

三陸沿岸の各地域は、交通網の整備される以前には湾ごとに隔離されており、それゆえ湾ごとに独特の文化・風習が発達してきたと想像されます。海的环境や生物の組成が湾ごとに異なっていることが、食文化や民族風習、人々の気質にまで影響していたかもしれません。三陸沿岸の湾レベルの各地域について、自然科学的な地域の多様性とそこに暮らす人々の文化や風習との関係を明らかにすることは、各地域の特性を活かした振興策を考える一助になり得るのではないかと考えました。

そこで、大槌町にある私たちの研究所、東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究セ



東京大学大気海洋研究所  
国際沿岸海洋研究センター  
センター長・教授

河村 知彦

ンターでは、震災前から釜石で「希望学」を展開してきた東京大学社会科学研究所の協力を得て、2018年4月から新しい文理融合型地域振興研究教育プロジェクト「海と希望の学校in三陸」を開始いたしました。これまで積み重ねてきた大槌湾を中心とした沿岸の海洋学、すなわち海洋環境や生物群集、生態系に関する研究をベースにして、湾レベルの地域ごとの環境や生物群集を比較するとともに、人文社会科学的な地域的特徴の抽出を進めていきます。さらに研究の成果を、対話型授業などを通して地域の未来を担う若者たちと一緒に考えていくことで、各地域の地先の海の特性を理解し、各地域のローカルアイデンティティを再発見する、さらにはそれを活かした地域振興策を考えていきたいと思えます。それと同時に、そのような希望を見いだして地域の復興・振興を牽引する人材育成を進めたいと考えます。

「リアスの海から地域に希望を」。ぜひ地元の方と一緒に、三陸地域の未来を考えていきたいと思えます。